

サクラ

春と言えば花見、花見と言えばサクラ、サクラと言えばソメイヨシノ。日本を象徴するようなソメイヨシノだが、その歴史は列島の歴史からみるとかなり新しく、江戸時代の末期に交雑により見いだされた。明治になって公園や学校、川伝いの堤防などに盛んに移植され、日本各地に花見の名所が誕生した。それ以前は、吉野山（奈良県）や江戸の飛鳥山で代表されるようにヤマザクラが愛でられた。いずれもが栽培品種であり、その交雑の歴史は複雑である。サクラは変異が大きく、種間・品種間交雑も盛んなためたくさんの品種群ができしており、系統を明らかにすることは容易ではない。それはまた人とのかかわりが密接であることの証でもある。

ソメイヨシノは3月後半から4月上旬、ヤマザクラは4月中旬が見ごろ。5月になると変異の激しいヤエザクラの品種群が開花する。苑内には岐阜県白川村本覚寺のオオタザクラがあり、おしべが変化して花弁が100枚前後となる稀品種である。

ソメイヨシノ
2000年4月撮影



「サクラ」とはサクラの仲間の総称で、日本に自生する9種を含むサクラ属（学名ケラスス *Cerasus*）のこと。旧分類のサクラ属（学名プルヌス *Prunus*）はウメやモモ、スモモなど大きい果実や核果（サクランボやモモの果実の中心にある堅い部分）をつけるグループや、ウワミズザクラなど果実・花ともに小さくて花見には向かないグループなどたくさんの植物を含んでいたが、核果の形態の違いによって新分類のサクラ属とは異なる属に分類されている。ちなみに学名プルヌスは今ではスモモ属とされ、スモモの仲間だけを含む。

サクラの特徴は、先が切れ込んだ紅色の5枚の花弁をもっていること、気温が急に高くなる3月から4月にかけて新芽が開く前に花が一斉に開くこと、しかも他の植物に先駆けて開花すること。大木となり、枝ぶりがいいので、開花期は扇を開いたように花一色になることも大きな特徴である。このような性質が、田仕事の開始を促し、また、たわわに実った稲穂にたとえて豊作を祈願する。家族そろって墓所に集まり、先祖とともに豊作を祈願する地域もある。

ちよこっと植物学

植物の名称と分類

植物の名称には、普通名と学名があります。学名は、あるルールに従ってグループ分けされた複数種の植物の総称；属名と、さらに固有の名称が付けられた種小名の2つで1つの植物（種）を表します。この方法は「二名法」といい、17世紀の植物学者リンネによって提唱されました。

グループ分けのルールの基礎にあるのは長らく植物の様々な部位の形態などによるものでした。近年では、DNA分析が可能になり遺伝子的なつながりを基にした新たな分類法が採られ始めています。本誌では、日本で一般的である形態などによ

る分類法、新エングレー体系を旧分類法、遺伝子解析に基づくAPG体系（※）による分類を新分類法として記しています。

一方、普通名は、私たちが日常生活で呼んでいる植物の名前です。普通名は分類学的にはあいまいで、名前の付け方、呼び方こそが日本の文化といえます。新分類が正しいというわけではなく、あくまで的人為的な植物の分類であり、植物の名称は今後も変わる可能性があります。

※ APG：Angiosperm Phylogeny Group（被子植物系統グループ）

オニグルミ

4月

オニグルミはクルミ科を代表する堅果類の1種で、ふつうクルミと呼ばれてきた。クルミ科にはサワグルミやノグルミが含まれるが、食用となるのはクルミだけである。クルミは約1万年前に始まる縄文時代早期から食料として利用されてきた。堅果類とされるように果実の中に堅い核果があり、核果を割ると中には食料となる種子が1個入っている。果実は9月から10月にかけて成熟する。

クルミの開花は4月。枝の頂あたりに雄花と雌花が別々に咲く。雄花はたくさんの花が房になって咲き、尾のように垂れ下がるので尾状花序^{びじょうかじょ}と呼ばれる。雌花はその近くに上



オニグルミの花

を向いて咲くが、初めは小さくて目立たない。雄花が花序ごと落ちてから雌花の子房が次第に膨らんでいき、秋には緑色のふっくらとした果実になる。

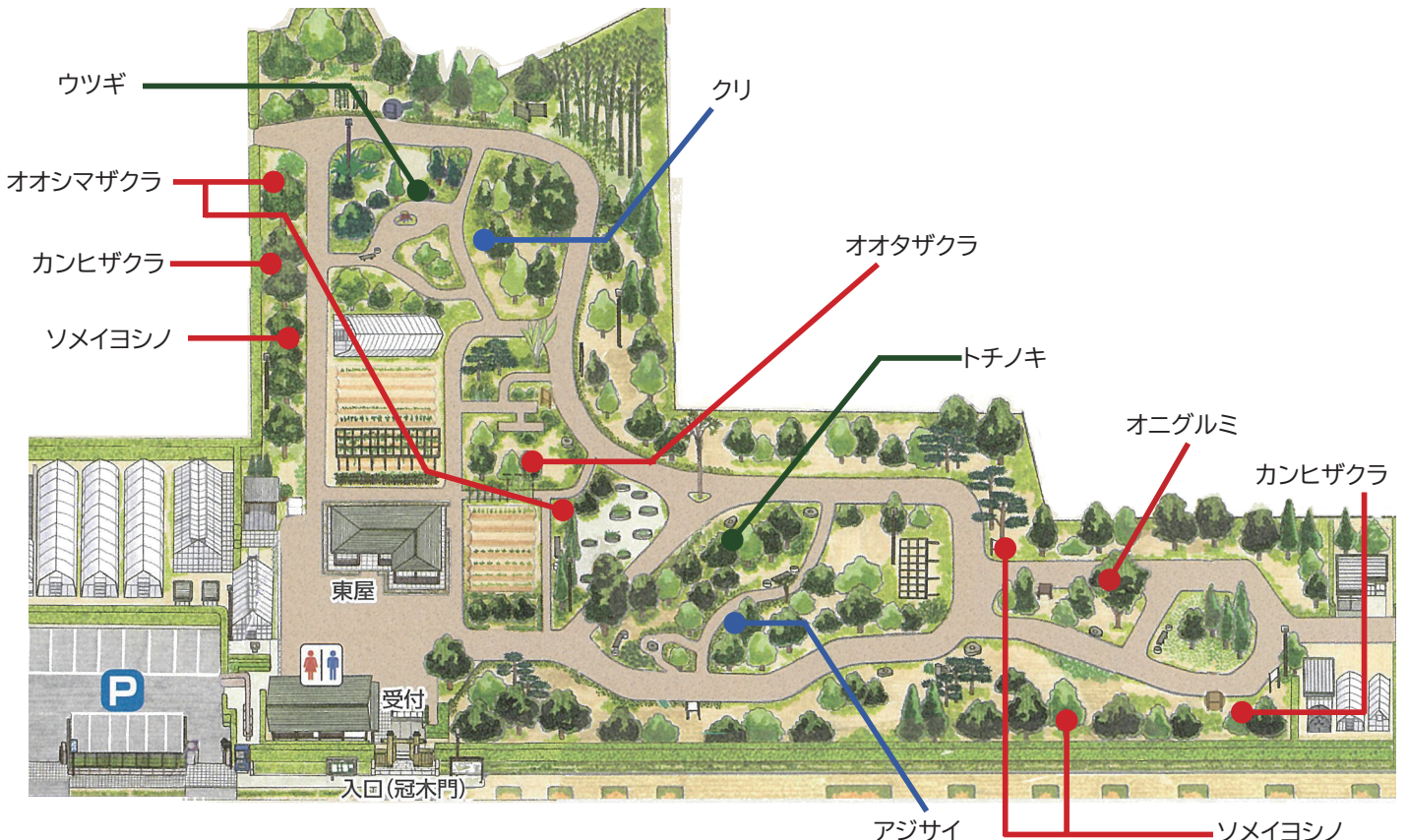
クルミの木材は建築用材にも利用され、地域によっては小正月の魔除けとして「オッカド棒」にも利用され、玄関の柱にくくり付けて悪霊を祓った。

※花序：茎や枝につく花の付き方、花の付いている茎や枝全体を表す。



本館第1展示室

縄文時代の食文化について展示されています。縄文時代の人々はどんなものを食べていたのでしょうか。



5月

トチノキ

トチノキは旧分類ではトチノキ科とされたが、新分類ではカエデ科とともにムクロジ科に編入された。近縁のセイヨウトチノキはマロニエと呼ばれ、パリの街路樹は有名。トチノキは縄文時代中期からさかんに利用されてきた。種子が食用に利用されたが、毒性のサポニンを含むので、縄文人はあく抜き技術を開発した。今でも地域によってはとちもちにして食べられている。

トチノキの花はとても華やかで、たくさんの雌雄混成の赤みがあった花が円錐状序を作る。個々の花にはたくさんの蜜ができ、ミツバチがその蜜を目当てに集まることで受粉が達成される。ミツバチが巣に蓄えた蜜は高品質なトチノキ蜂蜜となる。



トチノキの花

上向きに花が咲きます。少し離れたところからみてみてください。

クリ

クリはブナ科クリ属に含められ、ブナ科コナラ属とともに縄文時代から頻りに利用されてきた。果実は食用に、木材は建築・土木用材、さらに燃料材にも利用された。その利用は縄文時代の始まりの1万5千年前にさかのぼる。縄文時代前期から今のクリ農園に匹敵するほどの大規模なクリ林が営まれた。明治以降の鉄道設置期においては堅牢な木材が枕木として大量消費され、まさに縁の下の踏ん張り役となった。一方、コナラ属の果実はどんぐりとして親しまれ、クリと同様に縄文時代から食用として利用された。木材はとくに燃料材として利用され、明治以降は木炭にして大量消費された。



クリの花

秋の味覚として代表的なクリですが、クリの花を見たことのある方は少ないかもしれません。この機会に探してみてくださいはいかがでしょうか。



本館第5展示室

近代の日本の産業の発達について展示しています。もうすぐリニューアルのため閉室します。リニューアル前の展示室がみられるのは、2023年7月2日（日）までです。



著作者：macrovector / 出典：Freepik

クリの開花は6月。枝の頂に近いところに雄花と雌花が別々に咲く。クルミの花によく似ていて、雄花はたくさんの花が集まり尾状花序となって花火のように開出する。雄花は強い芳香を放ちミツバチを呼び寄せる。ミツバチが蓄えたクリの蜜はクリ蜂蜜となる。雌花はとても小さいものの、周囲には小さな棘が見える。この棘が密生し、秋にはイガイガと呼ばれる殻斗になる。殻斗は食用となる果実を保護しており、成熟すると十字状に割れ目ができ、中から栗色になった果実が放出される。

歴博ホームページでは、毎月みごろの花を紹介しています。
トップ>展示>くらしの植物苑>今週のみごろ



アジサイ科

ウツギやアジサイは、ガクが大きいことや葉っぱの形状など、共通の特徴をもっていることから旧分類ではユキノシタ科に含まれていた。新分類ではユキノシタ科から分離して、アジサイ科に含まれたが、ウツギとアジサイが仲間であるアジサイ科を代表する植物に変わりはない。ウツギは5月、アジサイは6月に開花し、いずれも五月雨あるいは梅雨の時期の象徴的な植物である。

ウツギ (卯の花)

ウツギは古代から卯の花として親しまれてきた。卯月の花という意味で、旧暦では5月から6月にあたる。万葉集には卯の花を詠んだ歌が多くあり、生垣やホトトギスとセットになる型が



ウツギの花
たわわに咲いた花を探してみてください。

作られていた。卯の花が長雨に痛めつけられるさまを詠んだものもある。このような歌の型はその後継承され、佐佐木信綱（1872-1963）の「卯の花の匂う垣根にほととぎすはやも来鳴きてし のぶ音洩らす夏は来ぬ」は良く知られる。

ウツギの花は真っ白く、たくさんの花が集まって集散花序あるいは円錐花序となってたわわに実った稲穂のように見える。たくさんの品種が作出されている。田植えのころ、長野県では水田の水口に開花したウツギの枝数本を立てる風習がかつてあった。畑や田の境界にウツギを植えて境界木とする光景は関東から東北にかけて広く見られる。開花期に流行る水疱瘡にかからないようにウツギの枝をまじないに使ったところもある。稲などにつく悪い虫や、悪霊を祓ったとみられる。歌に詠まれた生垣は花垣で、これもまた家に侵入しようとする邪気を祓ったのであろうか。魔除けの花と言えそうである。



稲作の歴史➡

本館第1展示室では、稲作の歴史が展示されています。ぜひ、こちらまでご覧ください。

アジサイ

アジサイの仲間であるアジサイ属は、ほとんどが本来の花である普通花のほかに、集散状あるいは円錐状の花序の周縁に特殊化した装飾花をもっている。装飾花の3～5枚の目立った花弁様のものはがく片とよばれるもので、中央の目と呼ばれる部分が本来の花である。アジサイはガクアジサイの花序全体が装飾花になってしまった品種。よく目にするのは装飾花だけのアジサイやセイヨウアジサイである。



アジサイ

アジサイ属は世界に30種ほどあるが、東アジアには落葉性の12種が知られる。江戸時代に来日したシーボルト

が愛したことは良く知られている。アジサイは長崎ではお滝さん花として知られるが、シーボルトが妻の楠本タキの名からハイドラングア・オタキサ (Hydrangea Otaksa) という学名(※)を付けたことによる。

花の少ないうっとうしい梅雨期にあって、鮮やかな青から赤の花を咲かせるアジサイの仲間は、毎年新しい品種が加わりつつあることから、これからも人気を博していくことになるだろう。

※シーボルト命名以前に *Hydrangea macrophylla* という学名が付けられていたため、シーボルトがつけた学名は認められなかった。



国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

2023年4月11日発行

文・写真：辻誠一郎（東京大学名誉教授） 編集：島津美子（本館研究部）